



ねこくらす R18





🐾 猫と暮らす倉沢ちゃん達の設定 🐾

この本はジョゼさん (pixiv id=8543357) の作品「猫と暮らすシリーズ」の設定をお借りした内容になっています。



倉持

大学生。高校卒業後大学で野球。
一年だけ一人暮らしの後、沢村と
ルムシエアという名の同棲中。

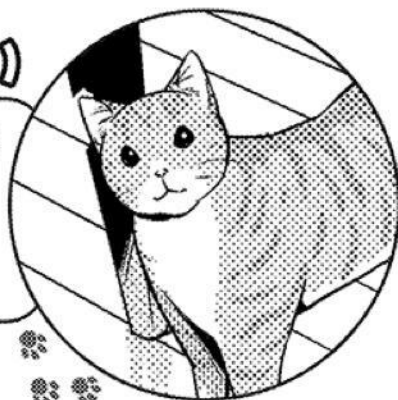


沢村

大学生。高校卒業後大学で野球。
倉持とは進学先は別。

猫：みゆき (元ハナ)

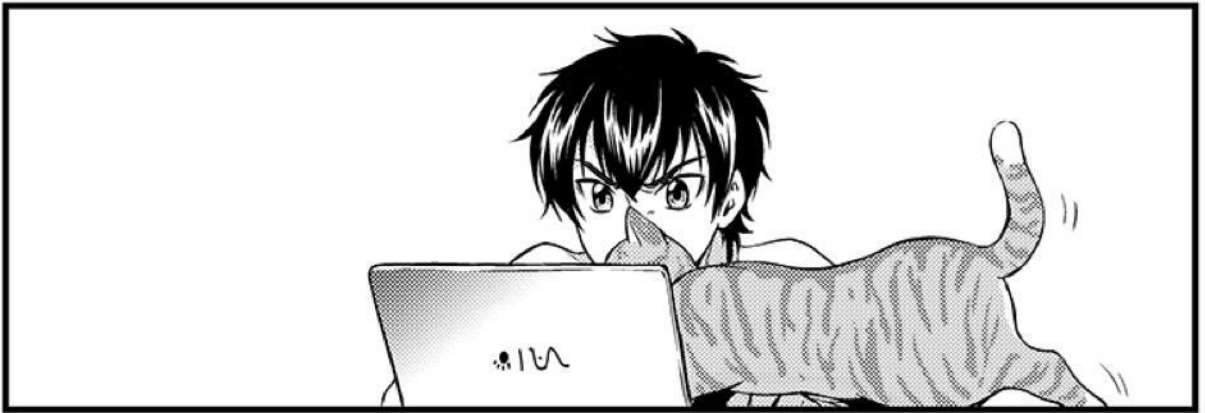
元は御幸の飼い猫。後援会のおいずちゃんから
貰った茶トラのオス。去勢済み。
倉持により、みやまと改名される。
愛称みーちゃん。



御幸

高校卒業後関東にあるプロチームへ入団。
遠征も多く、猫を飼うのも早々に断念。
可愛がっていたので断腸の思いで倉沢ちゃんちに譲る。

ジョゼさんの pixiv で、猫と暮らす (作品 id=4514646)、
猫と暮らす 2 (作品 id=4623460)、猫と暮らす 3 (作品 id=4789098) を読むと、
より楽しめると思いますよ! (´▽`)ノ







か
4
テ →

ほあああ〜



たたたた
たた!

あたたたた
たた!



お前はもう
死ん
ーから!

まあちやあ

びんご



お出掛け前の
猫毛取り

って、それ俺の
セリフじゃね!?
言わねーけどよ!!

取れたか?

あべし!



シヨゼさんが小説を
書いて下さいましたー♡♡



うーたまらない
かわゆさ!!

幸せな2人をニ堪能
ください!

甘いよお〜♡



二人と一匹に会いに行く

プロ三年目の今年、御幸はレギュラーポジション獲得のためのチャンスを遂に掴んだ。オープン戦から好調だった打撃面のアピールが功を奏し、開幕戦からはずっとマスクをかぶっている。

チーム自体は勝ったり負けたりで中位をキープしつつ、気付けば月も改まった九月の初旬。いよいよシーズン終盤ということもあり、クライマックスシリーズ出場を目指すチームの士気も高い状態だった。

だがその一方で御幸は少々疲れてもいた。シーズンは長く、レギュラーとして試合に出続けるのも今年が初めてなのだ。体力面での消耗もあったが、より精神面の消耗が激しかった。プレーに影響が出るには至っていないが、そろそろリフレッシュしたいという欲求は強く、そして今、遠征から戻った御幸が目指す場所はひとつである。

御幸は携帯電話のアドレスを呼び出し、かつてのチームメイトの名前を選択し通話ボタンを押す。数コールのあと、出たのはやはり本人ではなく、同居中の後輩である沢村だっ

た。

『もしもし。こちら倉持』

『またお前かよ。この時間帯に掛けると本人出たためしがねーな』

『失礼な！別に出ない選択もできますけど!?無視した方が良かったんすかね!?』

『コラコラ、そうへそ曲げんなって。それより今から行つていいか?』

『…仕方ないっすね、そういう約束だし!』
『元相棒なんだからもっと歓迎してくれよ』

よく言う!と、きゃんきゃん吠える沢村をいなしながらタクシーを捕まえる。そのまま二人が住まうマンションの住所を告げ、じゃあ二、三十分で着くからと言って電話を切った。途端に静かになる車内で目を閉じる。思い浮かべるのはかつてのチームメイト二人の顔ではなく、数ヶ月前まで御幸の元に居たハナという名の茶トラの猫だ。

それは後援会の会長夫人から貰い受けた一歳になる雄猫で、初めて動物を飼う御幸とも実に相性のいい、とてもおとなしい賢い猫だった。とはいえやはり猫は猫で、気まぐれに御幸を振り回し、時折苛立たせ、心配させながらも大いに癒してくれた。生き物の世話など面倒だと少しも思わなかったわけではないが、思いのほか猫との暮らしは御幸を幸福にし

た。

しかしそんな幸せもそう長くは続かなかつた。仕事柄遠征で留守にすることも多く、独身の御幸に猫を飼い続けることは難しかったのだ。

何度か倉持と沢村に預かってもらうことを繰り返した後、ハナはストレスが原因と思われる病を患った。それを機に、猫を譲る気はないかと二人に持ちかけられ、結局その申し出に頷いたのが梅雨の頃。ただ一つ、会いたい時にはいつでも会わせてくれという条件で、今ハナは倉持と沢村のもとで元気に暮らしている。

うとうとしながら猫のことばかり考えている間に、御幸を乗せたタクシーは目的の場所まで辿りついていた。そこは小ぢんまりとした外観の、単身者もしくは若夫婦向けと思われるマンションで、元チームメイトの二人はその三階に居を構えている。

2Kという間取りが男二人では手狭なのではと思ったりもしたが、あまり物を持たない主義なのか、あくまで仮の住まいということなのか、二人と一匹の住まう部屋は案外広々としていた。

部屋の前でインターホンを鳴らせば、中から「開いていますよ」と間延びした沢村の声が聞こえてくる。何故インター

ホンを返さないのかと思うが、沢村のすることにいちいち突っ込んでいてはきりが無い。勝手知ったるなんとやらでドアを開け、逸る気持ちを抑えながらお邪魔しますと声を掛け、すると奥から顔を覗かせた沢村がいらっしやいと答え、またすぐに引っ込む。ドアの前に立った時からわかっていたことだが、今日の夕飯は餃子らしい。

リビングとして使われている洋間にはローテーブルが置かれており、その上に配置されたホットプレートにはこれでもかというほど餃子が焼かれていた。

「倉持は？」

「御幸先輩が来るって言ったら、ビール足りないから買ってくるって」

「そりゃ悪かったな。てかいつの間にそんな気遣いができる男に」

「倉持先輩は元から気の利く人っすよ」

沢村の惚気のような返事にははいと返しながら、視線を彷徨わせハナの姿を探す。すぐにソファの上でゆったりと寝そべる姿を発見し、「ハナ」と呼び掛け近寄れば、すかさず「今はみーちゃんです！」との訂正が入った。

勝手に名前まで変えるなよと思うが、所有権が移ればそういうものなのだろうか？猫もすっかりみーちゃん呼びに慣れてしまったらしく、ハナと呼び掛けても以前のように反応

してくれなくなつたのが切ない。とはいえ目の前でゆつたり
幸せそうにまどろんでいる姿を見れば、もうなんでもいいの
だという気になるから不思議なものだ。

「御幸先輩、飯は？餃子食つてく？」

「俺の分もあんの？」

「二応多めに焼いてつけど、足りなかつたら焼きそばとかな
らまだあるし」

「じゃあいただこうかな」

沢村は了解と言いながらホットプレートに湯を注ぎ、立ち
上つた蒸気を閉じ込めるように蓋をした。食欲をそそる匂い
に胃を刺激され、それまで感じなかつた空腹を意識する。

「美味そうだな」

「でしょ!?この餃子すげえ美味いんすよ!」

どこにでも売っている市販品だというのに、何故か得意げ
に笑う沢村は相変わらずバカっぽい。だが同じバカっぽさで
あつても、御幸が見てきた笑顔とはどこか根本的に性質が違
う。まるで邪気のないその笑顔は、バッテリーを組んでいた
頃にはお目にかかれなかつた類のものだ。

倉持と暮らすこの部屋が、沢村にとつて完全なるテリト
リーだというのもあるだろう。しかしそれだけでは説明のつ
かない柔和さに、性格までもが変わつたかのような錯覚を覚
えた。それでもひとたび口を開けば、大抵は生意気かつバカ

丸出しの沢村であることに違いはないのだが。

餃子が焼き上がる頃には倉持も帰宅し、三人で何に對して
かお疲れと言つて乾杯する。プロ野球はシーズン終盤に突入
しているが、大学野球はこれから秋季リーグが開幕するとい
うことだった。

二人はそれぞれ違う大学へ進学し、今は敵同士ということ
になる。付き合っているなら同じ大学でも良さそうだと思う
のだが、沢村はそんな理由で進学先を決めたりはしなかつ
た。

野球を続けるとなれば、真つ先に立つのはやはり投手とし
ての欲求なのだろう。その本能に従い、青道で叶えることの
できなかつた夢を叶えるべく、怪我の癒えた恩師の跡を追う
と決めたのだ。そんな沢村の選択を、倉持にどう思っている
のか聞いたことがある。だが答えは至つてシンプルなもの
だった。

『野球じゃどうしたつて捕手様には敵わねえつて、散々思い
知らされてつからな。その辺はもう諦めてる』

そう言つた倉持の表情はさばさばしたものだつたが、そん
なに簡単に割り切れるものなのかと思つた。だが散々思い知
らされたという言葉に、少しも苦い物を感じなかつたわけ
はない。

沢村がイップスで苦しんでいた頃、倉持にどうするんだとせつつかれたことがあった。御幸の言葉に意外なほどあっさりときれた倉持は、確かに沢村を気にかけて、だが何もできない現実には悔しい思いを抱えていたのだろう。御幸自身何が出来たわけでもなく、きっかけになればとクリスにすべてを託し、その後は沢村が自分の力で立ち直ったのだ。

倉持自身は自分の無力を嘆いたのかもしれないが、それでも陰になり日向になり沢村の一番近くで力になっていたのはやはり倉持だったのではないかと思う。だから沢村は誰より素直に倉持に甘え懷いた。少なくとも御幸にはそのように見えていた。

沢村と付き合っていると、倉持に聞かされたのは青道を卒業してからだったが、妙に納得したのも憶えている。まるで気付きもしなければ、驚きの告白だったというのに、何の違和感も嫌悪感も持つことがなかった。倉持と沢村。この二人が一緒にいるという状態が、とても自然なことのように感じていたからかもしれない。

あんまり驚かねえんだなと倉持に言われ、驚いてはいると返し、でもいいんじゃないかね？お前らお互いに好き合ってる？と続ければ、倉持は見たこともないような表情で首肯し、ずっと一緒に居てえんだと静かに言った。

御幸はその時初めて、倉持を心の底から羨んだように思

う。どこか大人びた表情で、大事な存在ができたのだと告げる横顔は今も忘れ得ない。そして自分も誰かを愛してみたいなどと、一瞬の気の迷いでも思わされたのも事実なのだ。

沢村はあんな倉持の顔を見たことがあるのだろうか？目の前の二人はただの先輩と後輩にしか見えない。恋愛関係にあるなどとは、聞かされでもしなければ誰にもわからないのではないかと思う。

二人の関係を知る御幸の前でこそ、隠すことなく平気でのろけたりいちゃついたりもするが、それがなければ本当にただの仲のいい先輩と後輩なのだ。だから少し気になった。

「お前らのことってさ、俺以外に誰が知ってるの？」

「……なんだよ急に」

「特に意味はねえけど、そういえば他に誰が知ってるのかなあってただの興味」

「なんだそれ」

どこか呆れたような口ぶりの倉持が沢村の顔を見る。沢村も倉持の顔を見て、これがいわゆるアイコンタクトというやつかと思った。

「お前以外は亮さんと春市にしか言ってねえけど」

「お兄さんにはどちらかという吐かされた感じっすけどね」

ハハハと乾いた笑い声を上げる沢村の様子に、見てもいな

いその現場がありありと想像できた。

「増子さんは？たまにハナ、…みーちゃん預かってもらってんだろ？」

「……言ったら泣かれそうだよ」

「はあ？」

「増子さんならわかってくれるって思うけど、なんかもう家族に言うくらいには緊張するっていうか」

互いに顔を見合わせ、頷き合う二人に思わず噴き出す。何を笑っているんだと二人に睨まれ、なんとか笑いを収めたものの、増子が二人にとってはすっかり身内認定だというのがおかしかった。本当にこの5号室の三人は、奇跡のような組み合わせだったのだと改めて思う。

「いつか言った方がいいのは家族も同じだろ？きつと喜ぶんじゃないかね」

「お前は他人事だと思って軽く考えすぎなんだよ、ムカつく！」

そうだそうだと同調する沢村だったが、それでも倉持よりはとんと気楽に考えていそうな表情だった。いずれ説得して知らせに行くのではないかと思う。

意外と慎重派の倉持と、前向きであっけらかんとしたところのある沢村と。二人は本当にいいコンビだ。ろくに恋愛経験もない御幸だったが、それでもこの二人ならいつまでも上

手く付き合っていけるのではないかと思える。というよりはいつまでも仲良く一緒にいてもらいたいのだ。

倉持の膝に乗り、ハナはテーブル上の餃子の二オイをふんふんと嗅いでいる。それを沢村がみーちゃんは食べちゃダメと言つて皿を取り上げる。不満げに鳴く猫に対する表情はそれぞれだったが、今やハナは二人の子供のようにも見えた。ハナを譲り、いつでも会わせてくれという約束を取りつけた。だから猫に会いに来ている。だが多分それだけではないのだ。

かつての仲間として、友人として、いつでも当たり前のように迎え入れてくれる二人が、御幸にとつてもかけがえのない存在になりつつあった。

御幸が会いに来ているのは猫だけではない。今や家族になったかのような錯覚を覚える、この二人と一匹に会いに来ているのだ。

くるむくるまれる

風呂上がりの沢村は、一足先に寝室に敷かれた布団の上にごろんと横になった。今日はベッドより布団の気分だったからだ。明日は久々のオフで、倉持も午後練のみだというからには、今夜はきつとセックスをする。それならやはりベッドの方がよかったかと思いを回らせ、だが布団でも特に問題はないという結論に至った。

風呂上がりの身体は熱く、緩めに入れたクーラーの風が心地いい。程よく冷えたシーツの上で伸びをしながら、溶けてしまいそうだと思った。

練習の疲れがないわけではなく、油断すると瞼が落ちそうになる。クーラーの低い唸りは子守唄のようで、このまま寝てしまいたい欲求が倉持とのセックスよりやや優勢になり始めていた。

いかんいかなと思いき上がる。こんな時は猫と遊ぶのが一番と思いい、だが今夜はもうずっとソファの下に陣取っているのを思い出した。

爪切りをした後、猫は大抵機嫌が悪い。信じていたのに裏

切られた！と言わんばかりに距離を取られ、丸一日は近づいても逃げられる始末だ。そのことにショックを受けられないわけではないが、今日はいつともよりずっと上手くいったのと思えばやはり切ない。

思い起こせば爪切りデビューの日も大変だった。よく調べもせず、ただ緩く抱いて肉球を押す。するとにゅっと出た爪に「おお！」と感嘆しながら爪切りを近づけた。途端に猫は猛然と暴れだし、聞いたこともないような鳴き声をあげ、二人してしたたかに引つ掻かれ、噛みつかれ散々な目にあっただ。猫にしてみればこっちのセリフだということになるのだ。猫にしてみれば脱兎の如く逃げ去る猫を、二人して呆然と見送ったのは今思い出してもかなり滑稽だった。

その後もう爪切りは諦めよう派の沢村と、いや絶対切る派の倉持で意見は分かれたものの、最終的にはタオルで猫を包むというやり方に辿り着いた。それは猫の動画を漁っている最中、沢村が偶然見つけた爪切りの秘術だった。

まずは練習とばかりにタオルで猫を包んでみる。上手くいく時もあればいかない時もあった。だが包んでしまえば確かにおとなしくなる猫を見、これなら上手くいくかもしれないと二人して頷いた。そして試みる回数。ようやく爪を切らせてくれるようになったものの、不機嫌になることまでは如何ともし難かった。

明日には機嫌が直っていますようにと祈りつつ、先輩早く戻ってこねえかなとまた布団の上に倒れ込む。倉持の体温が恋しいと思いつつ目を閉じれば、そのままあっさり意識は途切れた。

何か髪に触れ、その心地よさにふっと意識が浮上する。目の前には倉持の顔があり、その手が沢村の髪を撫で梳いでいたのだ。

起きちまったかと問われ、起こす気はなかったのだろうかと思ふ。覚醒し切らない意識のまま手を伸ばそうとして戸惑った。身体が金縛りにあつたように動かないのだ。視線を下げ、自分の身体を見て更に驚く。

「な、なんじゃこりゃあ!？」

はつきり目が覚めて叫ぶと、倉持がいかにも愉快そうにヒヤヒヤと笑った。

「さっきのみーちゃんみてえだろ?」

そう言つてニヤニヤと笑う倉持は、沢村が眠っているのをおいことに、シートでその身体をラッピングするかのようになり込んでいたのだ。頭だけが出ている状態で、これではまるで糞虫のようだ。

青道時代からこういつた子供っぽいイタズラをする人ではあつたが、何年経つてもそういう部分は健在のようである。

普段はすっかり落ち着いた風であるだけに、出会つた頃を思い出すようなイタズラにあうと面食らう。だが同時に少し懐かしくもあり、沢村はついつい笑顔になつてしまうのだ。

解いてくださいよと言つても笑っているばかりで、倉持はその掌で沢村の顔や髪に触れてくる。そしてそれがまたどことなくいやらしいのだ。指先で頬をなぞつたり、耳を弄んだり、唇に指を這わせたりする。その軽いタッチがたまらなくくすぐつたく、倉持の表情や瞳の色は性的で、遊ばれていると悔しく思いつつも、徐々に身体に熱が溜まつていくのを感じた。

「せんばい」

「沢村、お前気付いてるか?」

「え?なに?何のことつか?」

「ん?……勿体ないからやつぱり言わない」

「なんで!？」

シートに包まれたまま抱き寄せられ、風呂上がりの熱い手で首やうなじを撫でられる。その温かさにうっとり目を閉じれば、耳の中に指を突っ込まれぞくぞくと背が粟立つた。思わず身震いすれば、お前やつぱり耳弱いよなどと笑う倉持にくちづけられた。

啄ばむようなそれは次第にねっとりとした熱を帯びたものになる。誘うように唇を開けば、ぬるりと進入してくる熱

い舌を嬉々として迎え入れた。長い舌で口蓋をくすぐられ、全身の細胞がざわつくような快感を覚える。身体の自由が利かない分、必死で舌を伸ばし倉持のそれに絡めた。ぢゅっと強く吸われ酩酊したように頭がぼうつとしてくるが、なんのことはない少しばかり酸欠を起こしているのだ。

唇が離れはあはあと荒くなつた息をつく。口の周りは唾液でべたべただというのに拭うこともできない。ねえせんばいと、解いてと訴えるが、倉持は口元を緩めるばかりでまるで取合ってくれる様子がなかった。

何か妙なスイッチが入っていないかと、次第に焦燥にも似た不安が募る。しかしそんな不安とは別に、倉持の視線と愛撫に身体は熱くなるばかりだった。

抱きしめたい。こんな邪魔な布越しではなく、自由になる腕で思いきり。早くその肌の熱さを味わいたいのだ。欲しいものが目の前にあつて、だが焦らしに焦らされ頭がおかしくなりそうだった。生理的な涙と、それ以外の涙が目尻に溜まつてつると落ちる。

「せんばい」

「んー？」

「意地悪しないで解いて」

「してねえよそんなこと」

「してんだろ！ずっと解いてって言うてるのに！」

「……」

「抱きしめたい」

「……」

「俺も先輩のこと抱きしめたいって言うてる！」

我慢の限界を迎え、半ギレで訴えると倉持がブツと噴き出した。それからまたヒヤハハと愉快そうに笑う。それはもう先ほどまで入っていたスイッチがオフになったかのようにいつもの倉持だった。

「お前やっぱ面白いよな」

「はあ!？」

「とろとろになってそのまま正体不明になるのかと思いきやいきなりキれるし。やりてえこと我慢しないところがいい」

「……それ褒めてませんよね!？」

褒めてんよと言って笑いながらようやく、倉持は沢村を包んでいたシーツを解きに掛った。散々焦らされ煽られまくった沢村は、腕が解放された途端に倉持に抱きついた。そしてそのまま倉持の唇にかぶりつきながら、下半身にわだかまつたシーツから脱出する。その際ジャージと下着までもが脱げかかったのは御愛嬌だ。どうせ今から脱ぐのだからと気にせず、倉持に責任とってつかあさいと訴えた。

裸に剥かれ、同じく裸になった倉持の両足の間に座らされ

る。背後から抱き込まれるスタイルは沢村も嫌いではなかった。足を緩く開かされると、倉持の豆だらけの手が内腿を撫でていく。だが既に反応している性器には触れず、沢村の首や耳を齧り、或いは食みながら、皮膚の薄い部分をなぞったり、戯れに胸の尖りをきゅつと摘まんだりした。

やはり焦らされている。完全に遊ばれている。沢村が我慢できずに欲しいと訴えるまで、決定的なものは与えないつもりなのだ。

そうとわかっていたらこそ、最初から我慢するといった選択はなかつた。我慢する意味もわからないとばかりに、沢村は素直に欲求を伝える。先輩触つて、と。

我慢できねえの？と、どこか楽しげに問う倉持に頬を舐められる。そんな風に尋ねられ、答えるのが恥ずかしいと感じる段階などどつくに過ぎていた。ずつと煽られ、お預けをくらいつばなしなのだ。すぐに欲しがって何が悪いのだと開き直る。

こくこくと何度も頷けば、望み通り倉持の手が性器に添えられ、指の腹が裏筋をゆっくりと撫で上げていく。それだけで声が出そうなほど気持ち良かった。先走り濡れた指先に力りと鈴口を弄られ、沢村の喉からはくうんと小動物が甘えるような声が漏れる。口を覆い声を我慢しても意味がないのだ。だから倉持が声を聞かせると言うことはない。声を我

慢している沢村も可愛いと言い、それでも耐えきれず漏れ聞こえるこの声が好きなのだと言う。そしてそれは初めてセックスの真似事をした時からずっとそうだった。

腰を上げるように促され、沢村はそのまま尻を高く上げた状態であつた。この体勢は正常位よりもずつと恥ずかしいと沢村は思う。滅多にしないが、確かにこの体位が一番楽ではあつた。だが倉持の顔が見られないこともあり、沢村は後背位があまり好きではなかつた。だからだろうか、いつもに増して口数が多くなる。

先輩居ますか？先輩何かしゃべって。先輩まだですか？もういいんじゃないかな？早く、と。それは単純に挿入を促すようであつて、ただ離れていることが不安なだけなのだ。

ゆっくりと時間を掛け慣らそうとする倉持は、沢村を傷つけないよう細心の注意を払っているだけだ。付き合ってから何年経とうと、変わらず気遣ってもらっている、大事にされているとわかるからこそ、こんなに不安に思う自分が情けなかつた。

ぎゅつとシートを掴み目を閉じる。ちゃんと倉持を感じていれば不安なことなどあるものかと、自分の中をかき回す指の感覚だけを追った。大丈夫、感じている。徐々に内側が緩み、蠢き、倉持を迎え入れる準備は整いつつあつた。じきに三本の指がすると抜け、その感覚に身を震わせながら挿入

の時を待つ。だが何故か身体の横に移動した倉持は、その腰を抱えるようにして沢村をひっくり返した。

驚いて倉持を見上げれば、左手で鼻先をぎゅっと抓まれ苦笑される。

「せんばい？」

「お前はホント、バック苦手だよな」

「え？」

「がんばって堪えてたみてえだけど、いつまでもガチガチでこりやダメだつてなつたわ」

「……すみません」

上手く出来ているつもりだったがだけに、倉持をがっかりさせたのだと思うと心が萎れる。だが倉持は何で謝んだよと言つて覆いかぶさつて来た。沢村は反射でぎゅっとその身体に抱きつく。触れ合った裸の胸が熱いとまで感じるのは、緊張で身体が冷たくなつていたからなのかもしれない。それに倉持が気付いてくれたことが純粹に嬉しかった。

「先輩、萎えちゃつた？」

「それでもねえけど」

本当だろうかと思ひ手を伸ばせば、やはり少々萎え気味で申し訳なくなる。沢村は身を起こし、座つた倉持の股間に顔を埋めた。倉持の性器を掴んで何度か擦りあげ、それからゆつくりと口に含んだ。熱い、と思ひながら深く啜えこむ。歯を

立てないよう気をつけながら、ちゅっと吸つては頭を動かした。

髪を撫でる倉持の手が、思い出しように耳を弄る。すると沢村は震え、意図せず歯を立てそうになった。そのたび倉持の腹筋に力が入る。何故かわざとそうしているような気がし、もしかして歯を立てられるのが好きなのだろうかと思つた。だがもうそんなことを確認している余裕はない。口を離し、舌先で鈴口をつつけば、息を詰めた倉持がもういいと言つた。

改めて身体を押し倒され、両足の間に陣取つた倉持に脚を抱えあげられる。口淫を施すうち、興奮した沢村の性器も硬くそそり立っていた。正常位は何もかもがあからさまだつたが、沢村はそれを恥ずかしいとはあまり思わない。いつでもありのままを見て欲しいと思ふし、それを見て興奮している倉持を見るのがたまらなく好きなのだ。

倉持がスキンを着ける間もどかしく、悪戯に膝でその脇腹をくすぐる。やめると叱られるが、嬉しくてはしゃがずにいられないのだ。自分でも本当に現金だと思ふ。後背位の時はあるほど気持ち萎れていたというのに、今倉持の顔を見て抱き合えるのだと思うとひどく気分が高揚していた。

「いいか？」

「うっす！」

「めちやくちや元氣じゃねえか」

「だって先輩の顔が見えるから」

「……そんなに俺に見られるのが好きかよ？」

「先輩の、俺のこと大好きって顔が好き」

「……お前こそな」

ぐっと腰を引き寄せられ、割り開かれた脚の間、ひくつく窄まりに倉持の怒張が押しあてられた。期待に息を詰めれば、力を抜けと促される。

いつものように先輩キスしてとねだれば、上体を倒した倉持に唇を食まれた。そういえば裸になってからはあまりキスしていなかったと思い、全然足りないとかばかりに熱心に舌を絡ませる。そうしてくちづけに夢中になってしまえば、身体から力は抜け、倉持の進入を妨げるものはもう何もなかった。

挿入と同時に、内臓を押し上げられるような圧迫感があったが痛みはほとんどない。全てを収めてしまうと、気持ちいいと言って倉持は深いため息をついた。動きを止め、沢村の内部がその質量に馴染むまで倉持は動かない。激しく動くまでのその僅かな時間、沢村は自分の腹を撫でながら、いつばいだと思った。倉持がここにいるのだと強く意識する。

そんな様子をどう思ったのか、沢村の頬を撫でた倉持に苦しいかと問われる。苦しいことはない。だから首を振る。

「先輩ので、ここがいつぱいだなと思って」

そう言っ腹を撫でると、一拍置いて倉持の顔がじわじわと赤くなるのがわかった。心なしか収まった生殖器も大きくなったような気がする。少しばかり苦しくなったので間違いないだろう。

ふざけんな、お前いい加減にしるよと、恥ずかしさで真っ赤になった倉持が腰を引く。生殖器の抜け出ていく感覚に背中が戦慄き、内壁は逃がすまいと倉持に絡みついた。反射的にイヤだと口走るが、それはただの始まりの合図に過ぎない。

激しく腰を打ちつけては引くという単純な動きに、沢村もあつという間に翻弄される。短い時間で感情の波が激しく上下したように、セックスまでもがそんな風に穏やかな雰囲気から一転激しいものとなった。

めちやくちやに突かれ、遠慮なく前立腺を擦り上げていく動きに、少しも声が抑えられない。やだといいを繰り返して倉持にどっちだよと突つ込まれながら、気持ちいいと狂ったように叫ぶ。俺もいいと言う倉持の首に腕を回し、うわ言のように好きと告げ、沢村は呆気なく絶頂を迎えた。それのように好きと告げ、沢村は呆気なく絶頂を迎えた。それから腰を引いた。倉持の抜け出ていく感覚にまた背を粟立て、あつあつと短く喘げば、倉持にふっと微笑まれ赤くなった。

互いに息が整うまでじっとしていたが、一足早く倉持が身体を起こし、汗と精液にまみれた沢村の身体を蹴くちやのシートで拭う。それからスキンを外し、ゴミ箱に放り込むと自分の身体も拭った。最後に沢村の唇に触れるだけのキスを落とし、その隣に身体を横たえた。

沢村はごろんと身体を反転させ、倉持の胸に顎を乗せる。それから凄く気持ち良かったと素直に伝えた。倉持は沢村の顔をじっと見つめ、俺もと言って頭を撫でる。

「先輩、俺がバツク好きじゃないの知ってた？」

「んー？なんとなくな。単純に正常位が好きなだけかと思っただけど、今日ので確信したわ」

「もうしない？」

「お前が嫌ならしない」

別にどうしてもしたいわけじゃねえしなと言われ、沢村は倉持の心臓の上に感謝のキスを落とした。

いつまでも、どうしてここまで大事にしてくれるのだろうかと思う。青道時代からぞんざいに扱われる部分は一定してあるものの、肝心の根っこの部分はいつもやさしいのだ。それは単純に好きだからという理由で説明のつくことなのだろうか？沢村も倉持の事が好きではあるが、だからといって倉持のように色々出来ているとは思えない。愛情深い人に愛さ

れ、沢村は幸せだが、果たして倉持はどうなのだろうか？

少しの間考え込んでいると、沢村と呼ばれ顔を向ける。もつとくつつけと言われ、嬉々として身を寄せた。激しい熱はもう穏やかな体温に戻っている。はねのけていたタオルケットを手繰り寄せ、倉持はもうそろそろ布団はしまってもいいなと言った。そういえばと、いつの間にかクーラーが消えていることにも気付く。沢村をラッピングしている間に倉持が消したのだろうか。季節はゆっくりと秋に向かっていった。

倉持に幸せかと問うのは野暮なことだろうか？沢村を見つめ、寝るかと言われ、眠そうに目はただただ穏やかそうに見える。少し伸びあがり、倉持の唇にキスをすれば、倉持は口元を緩めおやすみと言った。たったそれだけのことで、わざわざ問うことでもないかと確信し、沢村もおやすみなさいと返して目を閉じた。

リビングからは微かに猫が動きまわる気配がしている。そういえばすっかりみーちゃんのこと忘れていたなと思ひ、思うそばから意識は溶けるように霧散していった。

愛さずにいられない

いかなおとなしい猫といえどもさすがは夜行性。夜になると猫は活発に動き出す。

灯りを落とし、二人してベッドに潜り込んだ後、しばらくするととことこと歩きまわる猫の気配を感じた。

猫の足音は小さい。身体が軽いのだから当然とも言えるが、多分にその習性によるところも大きいだろう。とつとつと軽やかな足取りで歩いていたかと思うと、急にたたつとすつ飛ぶように走りまわったりもした。

寝室にしている和室と、キッチンを挟んでリビングにしている洋室の間を、何に興奮してか行ったり来たりを繰り返す。リビングでボタンと何かが倒れる音がすれば、それは大抵マガジンラックで、畳んだままソファの上に置いていた服やタオルが、朝には床に散乱していることも珍しくない。

猫との暮らしに慣れない当初、そんな猫の行動に多少の戸惑いもあったが、それもすぐに気にならなくなった。互いに三年に及ぶ寮生活を経て、多少のことではまったく動じなくなっていたのだ。しかも相変わらず野球三昧の二人は忙しく、加えて高校時代よりは真面目に勉強するようになったこ

ともあり、日付が変わる頃には大抵寝入ってしまった。そして一旦寝てしまうと多少の物音など気になりもしなかった。

「……」

「みーちゃんなんか興奮してますね」

「そうだな」

何に興奮しているのかはさっぱりわからないものの、どこかはしゃいでいる風に見えなくもないその様子を咎める気にはならない。動き回る猫以外はしんとした室内で、とさつと何かが落ちる音がし、また洗濯物かなと思う。きつと猫の毛だらけになっているだろう。チームメイトに猫アレルギーの者がいないことは幸いだった。

そんな倉持の物思いを知ってか知らずか、猫は寝室にも入ってくる。ベッドに乗り上げにゃあと鳴いてみせるが、何を求めているの鳴き声かはわかるはずもなかった。

みーちゃんおいでと、沢村は猫を嬉々として迎え入れる。猫が大好きなのだ。少々好き過ぎやしないかと思うが、好意の匙加減など出来ようもないのが沢村の長所であり短所でもあった。

猫は沢村の呼び掛けを無視すると、くあつと大きなあくびをしてからベッドを下り、あっさり寝室を出ていく。倉持はそろりと隣を見遣り、やはりしよげている沢村の肩をぽんぽんと叩いて慰めた。

「チーター様と違ってみーちゃんはつれないや」

「バーカ。ベッドで他の男の名前出してんじゃねえよ」

そう、嫉妬深い男のような冗談を言えば、くくつと喉を鳴らすように笑った沢村が身体を寄せてくる。

「みーちゃんにやきもちっスか？」

「お前もしょっちゅう焼いてんだらうが」

「だって先輩とみーちゃん異様に仲いいし！」

猫に対してだか、倉持に対してなのだかわからぬやきもちを焼く。ぶうと膨れた横顔も、猫が来るまでは知らなかった沢村の一面だ。

青心寮の5号室で出会って以来、既に四年半以上の月日が経過していたが、今でも初めて知ることは少なくない。沢村がこれほどの猫好きだということも、かなりの構いたがりだということも、御幸が猫を連れて来て初めて知れた事実だ。

倉持にしたところで、思いのほか猫好きだったのだと自覚するに至り、自分自身の知らない一面を垣間見る新鮮な驚きを楽しんでもいた。

猫が居ても居なくても、沢村との暮らしは充実したものになっただろう。沢村の卒業を待ち、久しぶりに同じ部屋で暮らす。それをどれほど心待ちにしていたかわからない。実際バカみたいに浮かれていたのだ。いつ誰がやってくるとも知れぬ寮での暮らしとは違い、ここは二人で選んだ、二人

で暮らすための特別な部屋だ。何に遠慮することもない。物音にさえ気を配っていれば、所かまわずキスしようが、抱き合おうが邪魔も入らない。それがどれほどの喜びだったかも、この部屋で暮らし始めてみるまで実感できなかったことなのだ。

「せんばいねむい」

「寝りゃーいいじゃねえか」

そう言っただけを抱き寄せ髪を撫でてやる。んんつと、それこそ甘える猫のように頭を擦りつけてくる様子に口元が緩んだ。

沢村にしろ、倉持にしろ、眠気が強いとやたら動物的になる。互いに相手に甘えるような仕草が出てしまうのは、大抵寝る前か寝起きに集中していた。

倉持の胸の上に頭を乗せ、まるで抱き枕を抱えるかのように沢村の腕と足が絡まってくる。動きを制限され、窮屈といえば窮屈なのだが、そうされることにもいつしか慣れてしまった。少しずつ寒い日が増え、季節は確実に冬へと移行している。沢村の体温はいつでも恋しいものだが、この季節の心地よさは格別だった。

大事な投手の肩が冷えないようにと毛布を引き上げれば、ぼとりと何かが畳の上に落ちる音がする。微かに鳴った鈴の

音で、それが猫のおもちゃだとすぐに気付いた。いつの間にかと思つたが、昼間にでも猫が隠しておいたのだろう。

耳ざとく鈴の音を拾つたらしい猫がやってきて、それを啜えるとまたリビングの方へとすつ飛んで行く。春に小湊兄弟から貰つたそのおもちゃを、猫はいたく気に入っていた。遊び過ぎてすっかりポロポロになつてはいるが、今も変わらずお気に入りの中のお気に入りなのだ。

リビングからはちりんちりんと不規則な鈴の音が聞えてくる。するとどうやらまだ眠りに落ちきつていなかったらしい沢村が低く唸り、もぞもぞと姿勢を変えるように動いた。いいからそのままおとなしく寝てると、言外に伝えるように背中を撫でてやったが、沢村は寝言のように掠れた声で猫の名を呼んだ。だがやはり猫は来ない。ひとり遊びに夢中なのだ。

「……みーちゃんひとりで遊んで寂しくねえのかな」

「そうなんじゃね？」

適当に答えながらとんとんと緩やかなリズムで背中を叩く。再びとろとろとまどろみ始めた沢村が小さく、だが妙に明瞭な声で俺は寂しいと呟いた。どうしてお前が寂しいんだよと思ひながら、猫に寂しいなどという概念があるのだろうかと考える。

「俺には先輩がいるけど、みーちゃんにはいない」

「沢村？」

「みーちゃんにもパートナーがいればなあ」

そう言ったきり黙りこんだ沢村の顔を覗きこめば、もう目を瞑つて寝落ちていた。まるでスイッチが切れたかのようなその寝方は、青道時代と何も変わらなかつた。

猫が寂しいと思うのかどうかはわからない。人間のように感じないだろう。ただ本能のままに相手を求めることはあるだろうが、それにしたところで己の遺伝子を残すための機能にすぎない。そしてあの猫はその本能すらも人に管理され、奪われた後なのだ。

寂しいのだろうか？ そんな風に感じたことはなかつたが、本当のところを倉持は知らない。

人間は人以外の存在にも、人と同じような心があるのだと錯覚しがちだ。沢村にもまた、猫に心を見いだし、理解し寄り添いたいとの心理が働いているのだろう。実際には猫が寂しいのではなく、パートナーのいない猫を見た沢村が寂しいと感じた。それだけのことなのだと思ふ。

沢村に倉持がいるように、倉持に沢村がいるように、猫にもかけがえのない相手を得てほしい。そういう沢村の気持ちもわからなくはなかつた。だが自ら選ぶことのできる人間と、人に管理コントロールされるペットではそもそもその在り

方が違う。現実には沢村が思い描くほど情緒的ではないのだ。それでもいつか、沢村は猫にパートナーを言いたすかもしれない。多分言う。そしてそれもいいと倉持は思った。

大学を卒業し、職を得て経済的に自立できる日が来れば、ここより広い部屋に移り、パートナーを得て二匹になった猫と一緒に暮らすのもいいだろう。

「……気の早い話だな」

暗い天井を見上げながら笑うと、いつの間にか戻って来ていたらしい猫がなあと鳴いた。

「みーちゃんも友達か恋人が欲しいかよ」

「にゃーん」

「マジか。じゃあ考えとくわ」

「……」

もちろん会話が成立しているわけではない。猫に心を見いだす真似事で、ただ遊んでみただけなのだ。

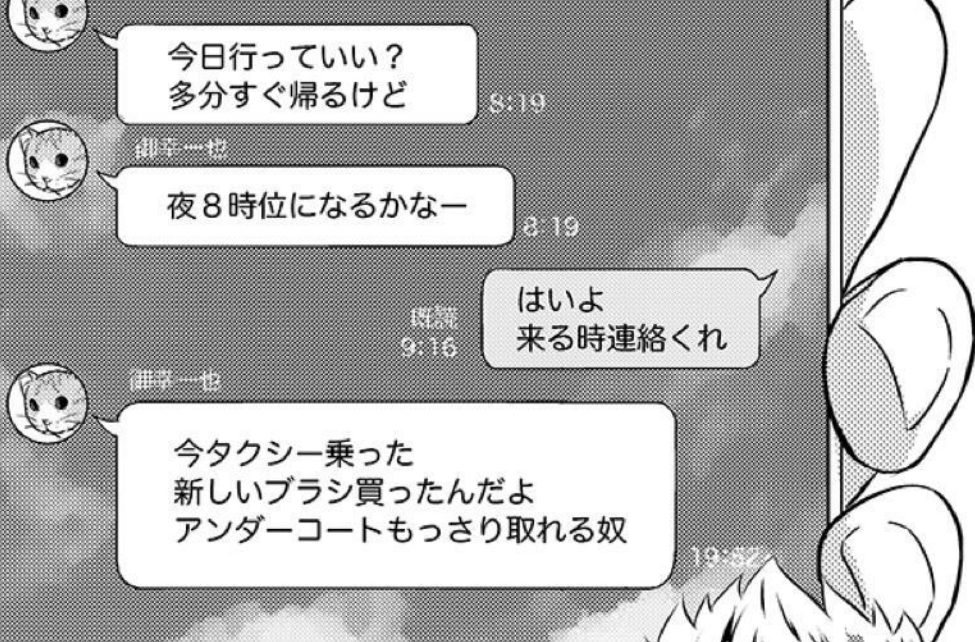
猫は二人の足元に落ち着くと、身体を丸めて寝る体勢に入っている。その様はやはり寂しそうには見えなかった。

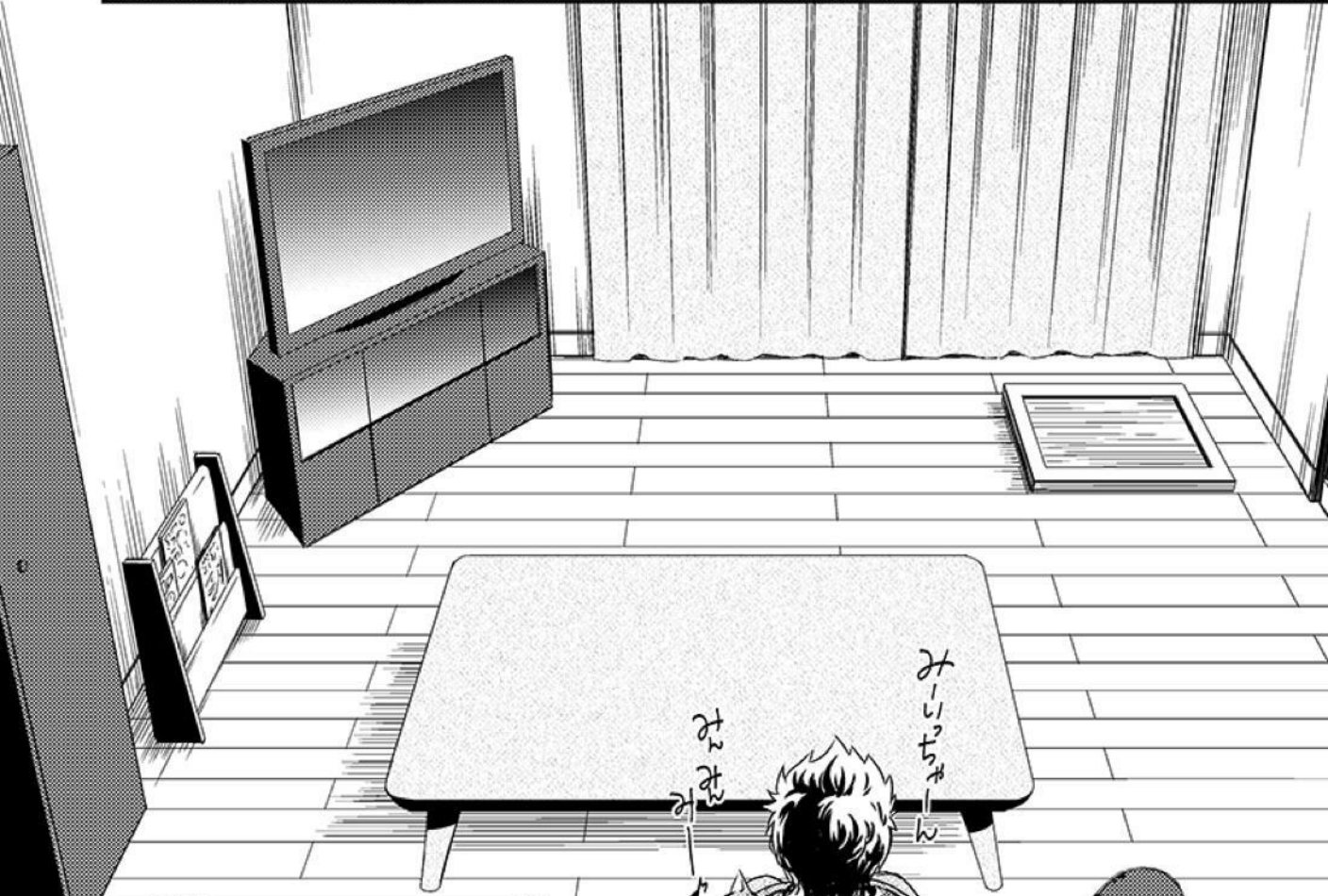
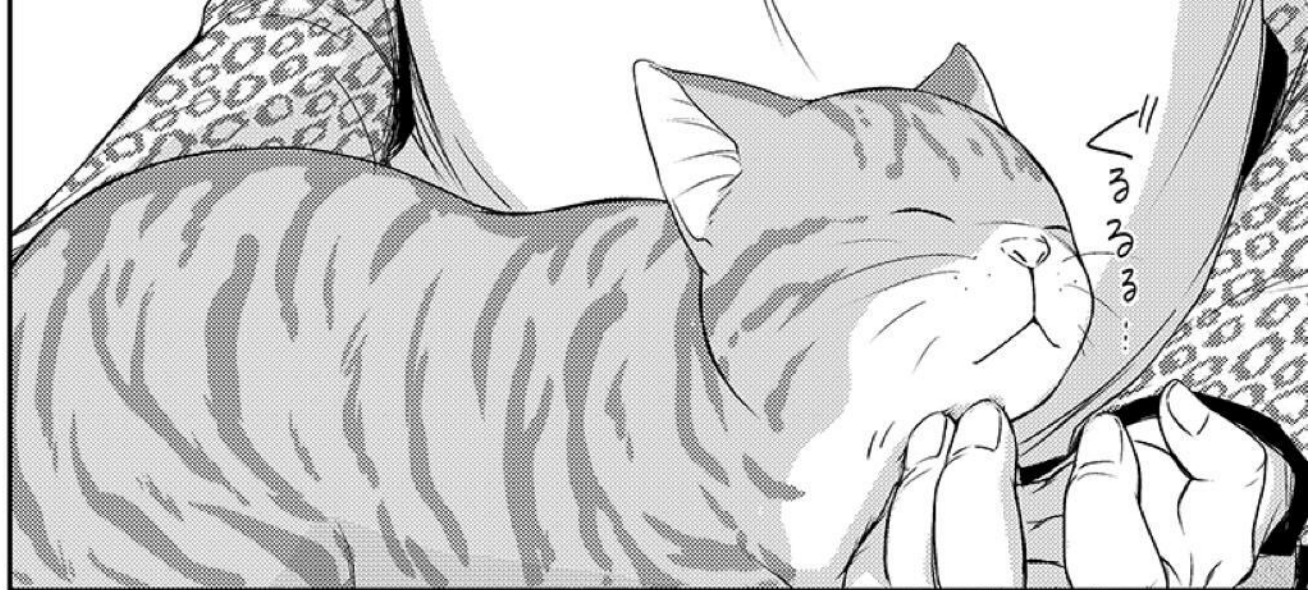
倉持には猫という生き物が、唯一無二の如く自由気ままを愛するもののように映っている。同じものを見ても、やはり沢村とは感じ方も考え方も違う。だからといって理解しあえないものでもなく、そういうものだ。二人は割り切っているのだ。少なくともこの四年半の時間の中で、少しずつそうい

うものだと思っただけ。その上で倉持は沢村をバカだと思

い、可愛いと思ひ、愛さずには居られないと思っているのだ。すうすうと穏やかな寝息をたて、眠る沢村はとつくに夢の中である。そういえば猫は夢を見たりするのだろうか？何かしらは見ているのかもしれないが、何も見なくても問題は無い。

倉持はようやく物思いに終止符を打ち目を閉じる。それきり部屋はもう、すっかり静かな夜の底だった。









お前ほんと好きね
ブラッシング

このブラシさ、
外側のしっかりした毛
オーバーコートじゃなくて
内側の柔らかい
アンダーコートの抜け毛を
重点的に除去するんだよ

だから見た目は美しく
無駄な毛はスツキリすんの
すごいだろ？

へえー

通販番組か！



今日沢村は？

飲みだとよ



お前
おいてけぼり？

……
あいっただけ飲みなんて
よくあることだよ

ふーん

さびちいねー

やめろその
口調



しかしまあよかつたよー



たしかになアイツなんだかんだで人に好かれるタイプだもんなー誰かさんと違って

お前に言われたくねーな



ハナ…みーちゃんブラシ気に入ってくれて



別に呼びにくけりゃハナって呼んでもいーんだぞ

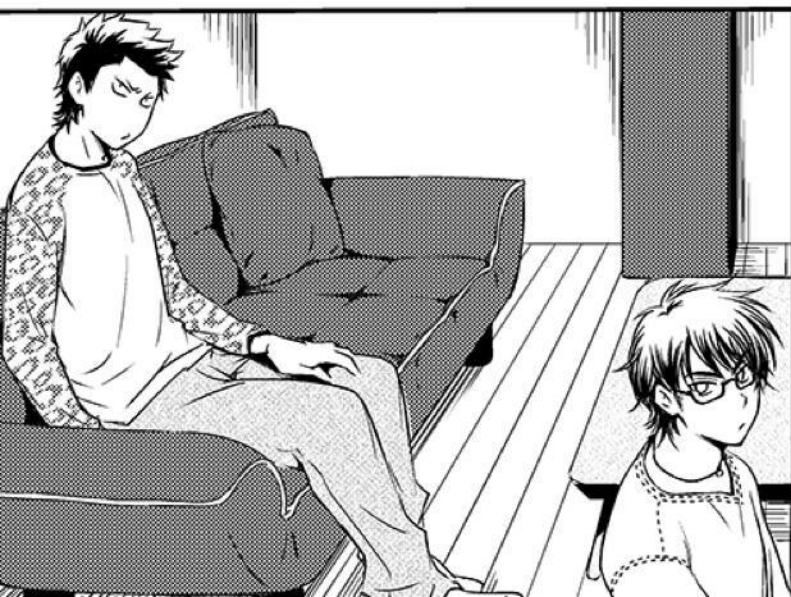
沢村 いちし

……

もうハナって呼んでも反応うすいんだよ！勝手に名前変えやがって！

ヒヤハハ！文句は沢村に言えよ！

まあ名前変えたの俺だけ



ガチャ
ガチャ



澤村栄純
ただいま戻り
やしたーっ!



…んだよお前
いつもは終電まで
帰ってこねーじゃねーかよ

まあまあ



あれ沢村
飲みだつたんじゃねーの?

センパイ来るから
一次会で帰って
きたんすよ!

ブツブツしてます
御幸運手!!

じーも



うわーなんだ
この毛の山は!?

みーちゃん
ただいまーっ!

あ!?

まあまあ!?





お客さん来るのもてなさないのも悪いかなって

ああ…
会いたかったっていうか…



へ？

一次会で帰ってくるなんてあんまねーじゃん



まあ…

客ねえ…
まあ、お前にとつちや先輩だしなあ



倉持先輩



ふはっ

イケメン
プロ野球選手だしな











じゃあ先に
カロリー消費
しとくか!

ビッ



やっほー

ピザ!
久々食いてー!

…じゃあ出前か?



大丈夫ッスよ

久々だからな
つらかったら言えよ



んあ…っ…

あああ…っ

ふる

やめとくか？

大丈夫か？
ちょっと力抜け

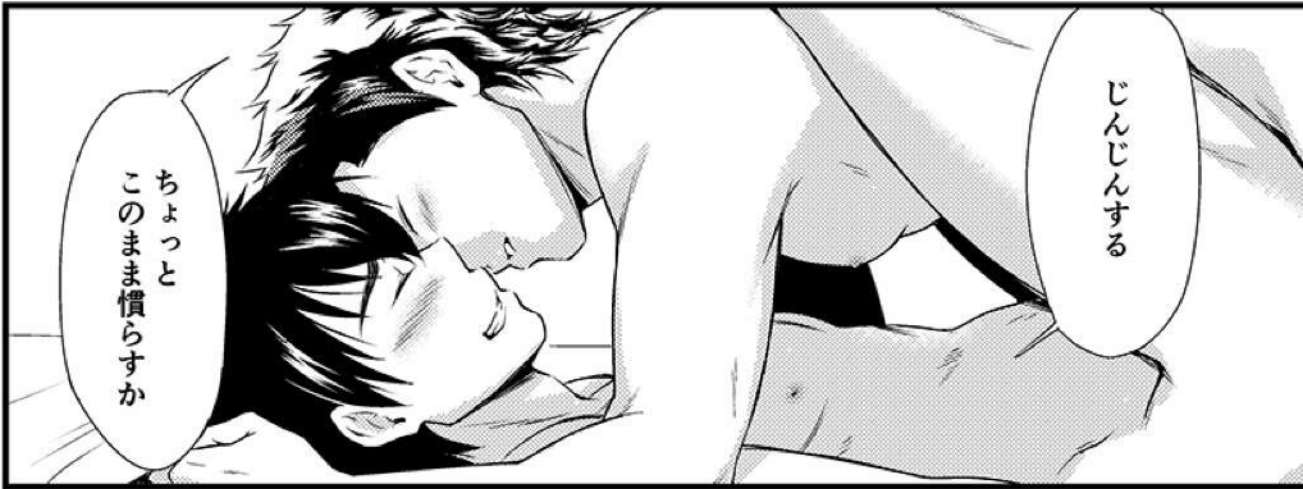
あ…っあ…

すげーしてえの…

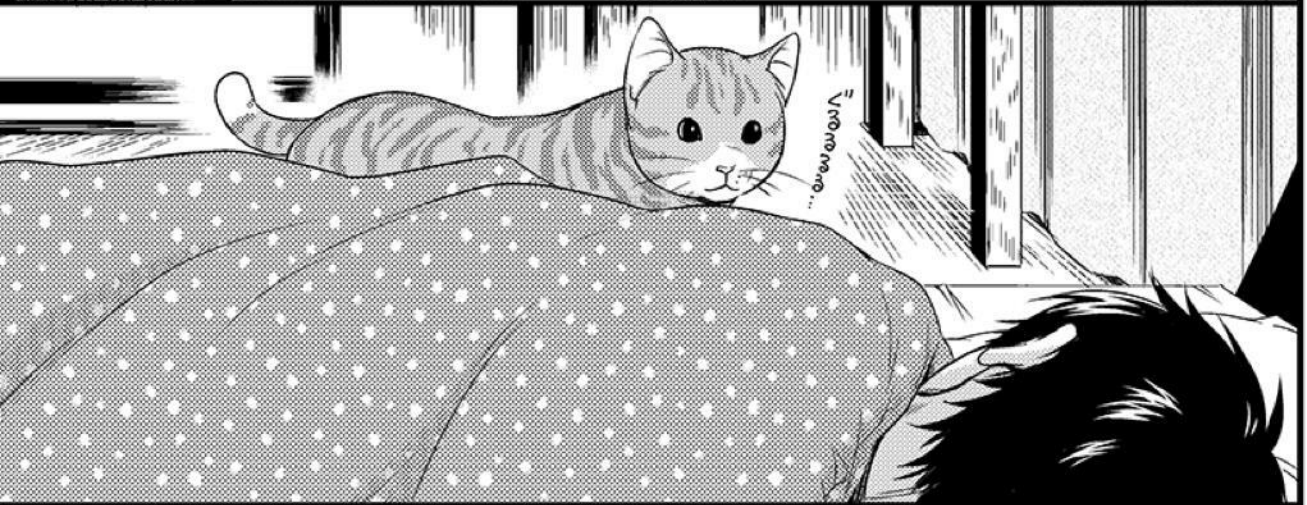
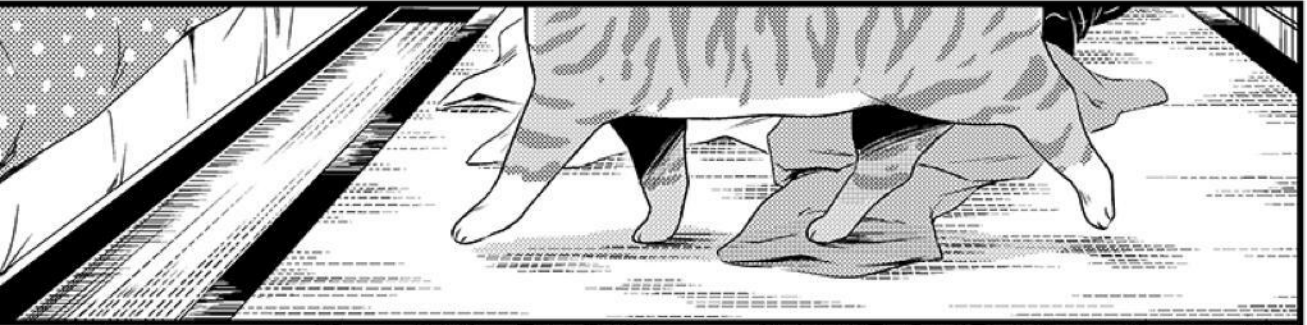
すげー…

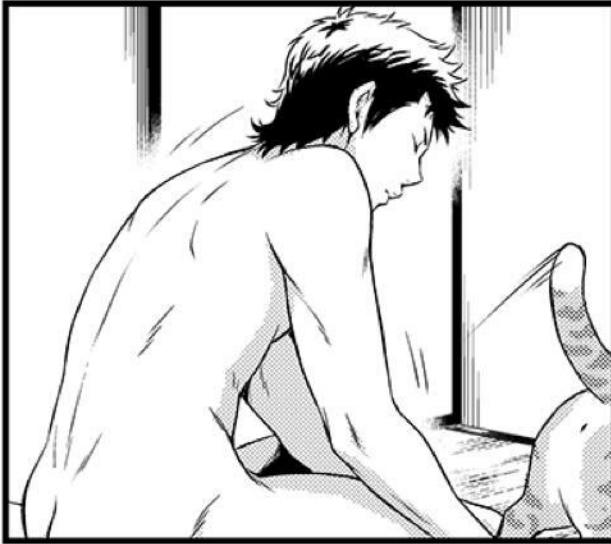
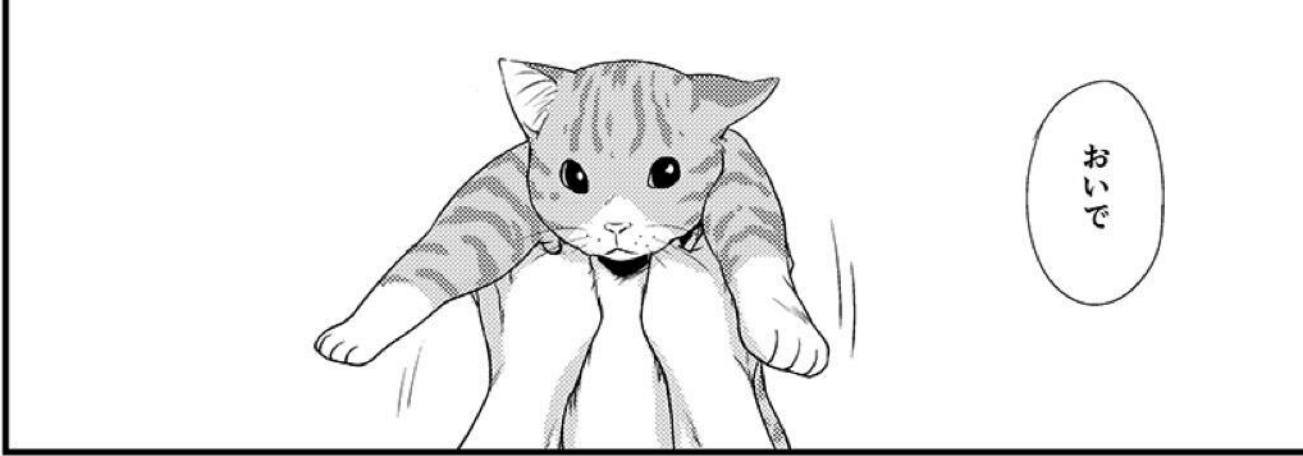
俺も

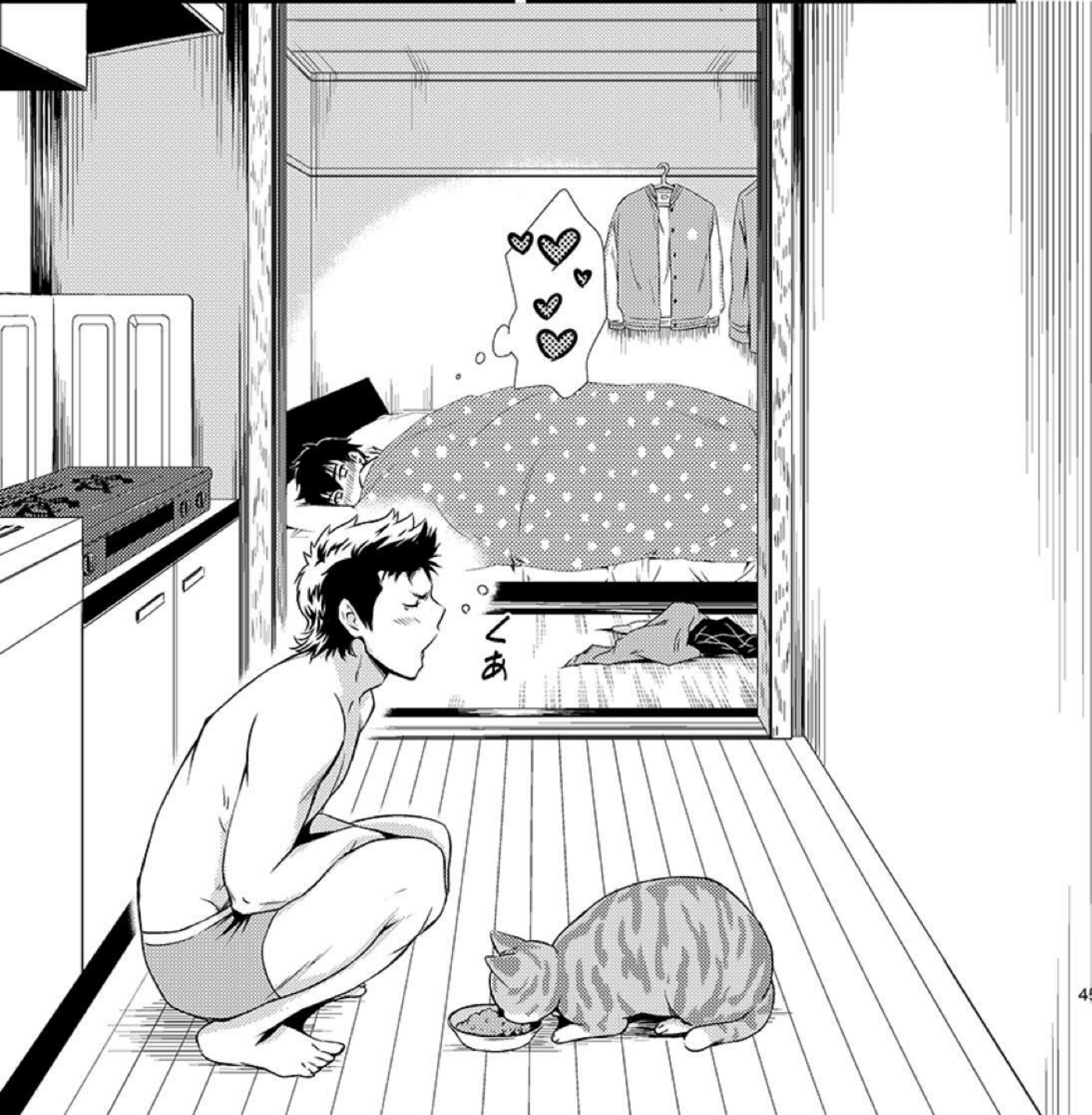
沢村…











お読みくださってありがとうございました。

ジヨゼさんの小説の
やさしい倉持先輩とかわいい沢村くんが大好きで、
設定お借りしてとうとう本にしちゃいました。
なるべくジヨゼさんの二人のイメージも壊さないように
注意したつもりですが、全く違ってたらすみません。

猫を飼っているというだけで
それぞれの違った面が見えてまたりしますよね。

楽しくて愛情あふれた生活を
送っているといいなと思います^^

ジヨゼさん、かわいい小説も寄せてくださって

どうもありがとうございました!

二人&みーちゃん的生活が覗けて幸せ♡

本当に、いつもジヨゼさんの倉沢ちゃんて

癒されております!





※おまけ

本購入の方に先着で差し上げた
マスクングテープの絵柄です